

世界農業遺産国際スタディ・プログラム 研修レポート

総論

2025 年 8 月 7 日(木)から 9 日(土)に能登視察が行われた。この視察の目的は、能登の「創造的復興」を通して震災以前よりも暮らしやすい環境を整えるために私たちができることは何か考えることである。今回視察に行き、行く前と行った後で能登の創造的復興に関してのイメージが変化した。まず、視察前は能登で産業をされている方は何かしらの震災による被害を受けていて、できるだけ多くの人からの支援を求めているという先入観を持っていた。しかし、実際に現地に行き様々な地域の方のお話を聞く中で、以下の 2 つの点から課題解決のためには単純に情報を発信して、ボランティアを集めればよいというわけではないことが分かった。

まず 1 つ目に、伝統のあり方についてである。事前学習から、能登には揚げ浜式塩田法や伝統的なお祭りがあるということや、震災以前からの人口減少に伴い、伝統を守っていくためには人手確保の必要性があることを感じていた。担い手確保の手段として、その伝統産業の魅力や独自性を情報発信すれば、興味のある人が集まってくると考えていたが、視察を通して魅力発信だけでは人手確保できないことが分かった。なぜなら、職人の求める伝統の形と新たな担い手の求める伝統の形には差があるからである。職人は手間暇かけて行う作業過程も含めて継承したいと考えている。奥能登塩田村では 1 6 時間も塩を煮詰める高温の建物で作業しなければならなかったり、裸足で熱い地面の上を歩かなければならなかったりと、塩が作られるまでかなりの体力仕事が必要である。塩作りに必要な海水も自力でくみ上げ、浜辺から運ばなければならない。しかし、新たな担い手は自分の生活と仕事のバランスを取りたいと考えている。例えば、海水のくみ上げを人力ではなく、ポンプを使ってくみ上げて効率化を図ることが彼らにとって魅力的に映ったりする。もしこのまま従来の形を変化させることなく伝統産業を続けた場合、担い手のニーズを満たすことができず職に就いてもらうのはかなり困難であると考えた。そのため、両者が互いの希望を主張するだけでなく、互いのことを思い合い、どこの点を妥協できるか考え、折り合いをつけることが大切だと感じた。

2 つ目に、被災者の方が求めている支援の形についてである。視察前は、ボランティアなど復興に携わることができる人が増えれば増えるほど良いことだと思っていた。しかし、白米千枚田愛耕会の方がおっしゃっていたように「大勢の短期間だけ活動するボランティアよりも 1,2 人の知識・技術力を持ち、定住することができる人が欲しい」という気持ちとがあることを初めて知った。ボランティア自体は地域の復興支援に必要な力であるが、被災者の今求めているものを供給することができなければ、そのボランティア活動は被災者ではなく自分の満足感を満たすだけのものになってしまう。ボランティアに限らず、支援を行う人はまず被災者のニーズを知ることが大切である。そして、それを踏まえた上で今後の取り組みを考えるべきだと感じた。例えば、ノトハハソでは新たな担い手確保のために、移住者が

担い手になれるような取り組みを行っている。移住者が新たな担い手となるには、生活と仕事のどちらも両立できることが必須である。しかし、冬の重たい雪や子育てのしづらさといった点が生活するうえでの課題となっている。そのため、この課題解決が移住者にとってのニーズであり、冬の寒さや雪の重さに耐え、子供がのびのび生活できる住居を建設することや、移住しやすくなるようなプログラムを立案することが必要である。これらはたくさんの人手があれば解決するというものではなく、知識・技能経験のある継続的に携わることのできる人が必要であるということを示していると感じた。

3つ目に、被災者の方が課題だと感じていることについてである。視察前は震災の影響でどの職にも悪影響が出ていると思っていた。機械や仕事場が破損して今まで通り作業できなかったり、資材を手に入れづらくなったりなどといった製品の質や製造工程に影響があると思った。実際もちろんそういった点に影響も出たという。しかし、震災で生じた課題というよりも震災以前からの課題が、今もなお仕事現場では課題となっている傾向がある。谷川醸造、白米千枚田、ノトハハソなどに話を伺った際に共通の課題として、人手不足が挙げられた。奥能登塩田村では震災による海面上昇により、海の水を人が汲むのが困難になっていたが、塩の性質が変わることもなかったという。一方で、後継者不足という課題があるのは共通していた。このことから、震災の影響を受けた部分を立ち直らせることが目的ではなく、復興して震災以前よりも人々が生活しやすい環境を整備することが一番大きな目標であることを改めて実感した。そのため、震災後の影響にばかり着目するのではなく、震災以前の課題が震災を受けてどのように変化したのかについても焦点を当てて考える必要があることについて学ぶことができた。

これらのことを踏まえて、能登の創造的復興における今後の展望として、震災以前からの課題である後継者不足を解消するために、移住者を増やすことが重要な鍵になると考える。移住者を増やすためには能登の魅力発信はもちろんのこと、新たな担い手になりたい方と職人の互いの意見を尊重しつつ価値観の差を小さくすることが大切だと思った。そして、両者のニーズに合う支援を行うことができれば、受け継がなければならない部分は継承し、柔軟に仕事とプライベートの両立ができる枠組みを形成することができるのではないだろうか。